

批評・紹介

Kwang-Chih Chang (張光直) 著 Shang Civilization

伊 藤 道 治

本書の著者張光直氏は、臺灣出身、現在ハーバード大學の人類學の教授として、アメリカを中心に活躍する學者であり、中國考古學・古代史の研究者としても多數の論著があり、最近では『The Archaeology of Ancient China』(邦譯名『考古學より見た中國古代』)の著者として一般にもよく知られてゐる。

本書の構成は、序論 Five Doors to Shang において、殷代史研究の基礎となる古文獻、青銅器、甲骨文、考古資料の性格や發見の過程及びそれらの研究方法を概観し、以下、第一部は甲骨文研究をめぐり、安陽地區の發掘研究の成果を中心として、1. An-yang and the Royal Capital, 2. Natural and Economic Resources, 3. The Shang Dynasty and Its Ruling Apparatus, 4. Economy and the Political Order of the State の四章にわけて、殷王朝の社會・政治・經濟の各方面にわたる性格を論じている。第二部は、鄭州をはじめとする、安陽以外の最近の考古學的調査・研究の成果を中心として、5. Cheng-chou, 6. Shang Archaeology outside An-Yang and Cheng-chou, 7. General Issues Concerning the Shang Civilization の三章からなり、殷文化の起源や夏文化の問題にまで論

及している。

最近の殷代史の研究は、特に發掘調査が盛んに行われ、また新たに安陽小屯南地の甲骨文資料が發表されるなど、誠にはなばなしい展開を見せている。そのために、殷代史の研究者にとつても、全般にわたつて詳細に目を通すことを困難と感ぜしめるほど多數の報告や研究が發表されるという事態を生ぜしめている。このことは本書の書目を見れば明らかであるが、今後の研究をどのような方針のもとに展開して行くかを決定するために、現在の研究情況と問題點の所在を整理することの必要を痛感せしめる。

その意味で、本書が出版されたことは誠に時宜を得たものと言ふことができる。勿論、本書は、著者張光直氏の研究上の視點から書かれたものではあるが、殷代史の研究者は言うまでもなく、中國古代史の研究者が是非一讀されることをおすすめる。以下において幾つかの點について、讀後の感想を述べたいと思うが、本稿では、紙幅の関係もあり、主として第一部に限定して述べることとする。

I 甲骨文の時代について

これまで、所謂自組・子組とよばれる二群の甲骨文の時代歸屬をめぐつて論争が行われて來た。即ち董作賓・島邦男兩氏はこれを第四期後半文武丁時代とするに對して、陳夢家・貝塚茂樹兩氏及び私は、これを第一期武丁時代(貝塚・伊藤は第二期を含める)として來た。甲骨文自體からは、張光直氏も言う如く、互いに相手を説得するだけの資料が得られず、出土情況を考慮するか否かによつて説が分れて來たと言へる。張氏は、この二つの説のうち、第一の董・島説をとる。その根據は必ずしも明確ではないが、第二説によれ

ば、第一期に複数の貞人集團が併存するという、複雑な構成となるに對して、第一説がよりシンプル―各時期に平均して貞人集團があらわれるということをするのか?―であるということが、根據とされているように思われる。これは根據として薄弱である。所謂自組・子組の貞人を、貝塚氏がそれぞれ王族・多子族の貞人と解したのは、その複雑さを説明するものであるが、張氏にはこの貝塚説に對して誤解があり、貝塚氏が王族に所屬する貞人集團とするものを、この貞人集團が即ち王族である、王族そのものが一つの貞人集團であると理解しているように、私にはとれるが、この理解は誤りであることは言うまでもない。但し、私自身は、この二組の貞人集團が、貝塚氏の言われる如く、王族・多子族の貞人集團であるか否かは、現在の資料からは確證できないと考えている。然し時代的には、貝塚氏と同意見であるし、このことは、最近發表された小屯南地の甲骨文によって證明されたと考える。

この二組の貞人集團の時代歸屬は、單に甲骨文斷代上の問題であるばかりではなく、小屯地區で發見された殷代の宮殿基壇址の時代を判定する際に重要になる。というのは、張氏がその判定の根據とするところは、石璋如氏の『殷虛建築遺存』であるが、この石氏の説は、董作賓氏の文武丁時代説にもついたために、石氏が基壇と出土甲骨の時代の關係を述べる所は前後に矛盾が生じ、そのままでは従えない所があることに注意しなければならないのである。

Ⅱ 殷都（殷虛を含めて）と商邑及び安陽との關係

甲骨文にあらわれる商―大邑商・中商も同一であると張氏は考えるが―を現在の何處におくか。これを安陽の小屯一帯とする説、或

いは現在の河南省商邱縣とする説、河南湯陰縣の舊朝歌とする説、或いは商という地名を數箇處に比定しようとする説などがある。張光直氏は、董作賓氏の説に従つて、第二の説をとるとともに、商という都市は、歴代の殷王が最も神聖視した所であり祖先の宗廟のおかれた都市であるとし、かつこの商邱の地を中心として、殷の人びとは、世界―張氏は *land* と表現する―を東西南北の四方―四土とも言う―に分けて意識していたとする（商邱地域は度々の黄河の洪水により、遺蹟は破壊されてしまったと説明している）。したがって、商は政治的というよりは、宗教的な意味のつよい都市と考えるのである。

一方、武丁から紂王に到る間の殷の首都は、安陽を中心として、北は河北省邢臺、南は河南省新郷の間であるとする。これは一つの都市を首都として考えるのではなく、首都圏―安陽地區がその核であることは言うまでもないが―として把握しようとするものである。この首都―武丁以前の各首都をふくめ―は甲骨文では茲邑（*Current Capital* と譯す―とよばれたとする（これは島邦男氏の説による）。この首都圏には各地に王室の離宮などが設けられていたとする。

そしてこの首都圏と先の商邱地區を含めた範圍をいわば内服と考へ、その外側は、北は河北省の南半、東は山東省西部、南は安徽省北邊・江蘇省西北部、西は山西省南部に及ぶ間が王室の勢力範圍であり、この間に侯・伯・田などの諸侯がおかれたとする。この勢力範圍は、殷王が狩獵などの目的で恒常的に行動する範圍であるとともに、經濟的にもその資源が恒常的に供給される地域であるとする。特に山西南部の鹽と銅と錫は重要であつたと考える。また王室

による狩獵は、皮革・骨角・肉などの面で重要な經濟的な利益をもたらしただけという。この範圍で生産される穀物―張氏は小麥も含めて考える―が重要であることは言うまでもない。

この勢力範圍の外側に、方とよばれる「外國」が存在した。北は山西北部の土方、西北は陝西北部の圉方、西は陝西中部をふくむ地域の羌方・周方・召方、南は漢水中流域の蠻方、東は山東・江蘇にまたがる人方、東北は河北中部の孟方がその代表であった。これらの方は、その受年||稔が卜占されていないことから見て、王室との經濟的な關係はなく、殷とは別個の政治權力をもつ敵對集團であったのである。

これらの方の存在位置は主として、島邦男氏の『殷墟卜辭研究』によるものであるが、このような外國としての方の存在地域から見ると、さきにふれた中商の位置を現在の商邱とし、それを中心として、四方を分けるということは、中心が東南に偏し過ぎるように思われる。中商を安陽地區におく陳夢家氏の説がより妥當ではないかと考えられる―陳氏は商という名で呼ばれた土地は、當時複数存在したとする。とくに第一期甲骨文にあらわれる四方名・風名から見て、當時の殷の人びとの世界の中心は、少くとも黄河以北の河南省内―或いは現在の洛陽地區を含ませるべきかもしれない―に求めるべきではなからうか。

これと關聯して考えるべき問題は、殷の最後の都の遺蹟としての殷墟は何處であるかということである。張光直氏は、これを現在の安陽小屯の北を流れる洹河の南で、淇河と黄河との間―南北の限界として―としている。即ち洹河を北限とし、詳しくはさらに南の淇河と黄河との間にあったとするのである。この考えは、『史記』項

羽本紀と衛世家に出る殷墟に關する記載を併せ考えたものであるが、具體的には、張氏も引用する宮崎市定氏の説にもとづくように思われる。しかし宮崎氏は『史記』の記載を綜合して、殷墟の位置を、洹水の南、淇水の北、黄河の西に當る地域内にふくまれる土地であり、漢以前の朝歌の地―現在の湯陰縣―であるとされているが、この宮崎氏の考えを誤解して、淇水の南・黄河の北と考えている。これは先にふれた首都圏の南に位置することになるため、結果としては、現在の何處と特定することは避けていると考えられる。

それは兎も角として、この首都圏の設定は、考古學的調査の結果―即ち殷後半の遺蹟の發見―と離宮が存在したという古傳承にもとづくものであるが、私は西周前期の利簋銘の商、何尊銘の大邑商という語は、この首都圏を意味していたのではないかと思う。その意味で興味ある考えである。邑という語は、都市 (walled town) と理解するのが一般であるが、西周時代の金文にあらわれる邑、春秋時代の敝邑と言われるときの邑などは、決して城市のみから成るものではないし、また甲骨文に見られる當時の國―一つの政治的な地域團體という意味で―の構成を考えても、邑 (城市) のみから構成されるものではないからである。

III 婦好墓の問題

この墓は、最近發見されたもので、武丁の妣の一人である婦好||妣辛の墓であるとされている。この墓は小屯の宮殿址群と非常に近接する場所で發見された。張氏も言う如く、小屯宮殿遺址のうちの北部にある甲組の基壇群の西南三〇〇米の所である。この基壇群は、張氏は石璋如氏の説によって、第一期武丁時代の居住家屋であ

るとする―さきにふれた如く、この石氏の説には疑問があるが、ここでは問わない。従って婦好はその居住区のごく近くに埋葬されたことになる。而かもこの墓の上には祠堂が建てられていたことが明らかにされているから、武丁以後の時代にも、ここに武丁の妣の一人が葬られていたことは、當然周知の事實であったと考えられる。しかも甲組の南にある乙組は、距離的に一層この墓に近く、また武丁の次の第二期からその建設が始まったと張氏は考えているのであるから、このような建築と墓との距離をどのように理解するか、これは當時の都市の性格のみならず、生と死という問題とも關聯して考えることである。前項で張氏が引用した宮崎氏は、安陽地區は、殷の都ではなく、殷―のちの衛をふくめて―の墓葬地域と考えられており、張氏もこの考えにふれているのであるから、張氏自身がこの問題をどのように考えるかということにふれていないのは残念である。

また張氏は、小屯村北部の建築址群のみが、當時の宮殿ではなく、この遺址の北を流れる洹河は當時は現在より更に東に流れており、小屯村東北で南折してはおらず、宮殿群はさらに東に擴がっていったとする。これとともに、現在まで安陽地區では、城郭が発見されていないが、張氏のいう首都圏の核であるこの地域は何んであったのか、婦好墓の問題と併せて考慮されるべき問題であると思う。もっとも私は宮崎氏の墓葬地説はとらない。戰國時代の都城を見ると、内城部と考えられる地區にも可成りの墓をとまなっているという事實とも併せ考えるべき問題である。

IV 衆と生産に關して

當時の社會は、族 *clan* が基礎的な單位であり、農業をはじめ、

手工業などもすべて、この族が生産活動の單位であったと張氏は考える。この考え方自体は、妥當であり、大部分の研究者の一致する所である。そして族には上級の族もあれば、生産に従事する下級の族があることも言うまでもない。その下級の族のなかで、直接農業生産に従事するものが衆或いは衆人と甲骨文に記載されるものであり、族内の下層メンバーであるとする。張氏はこの衆が、中國でよく言われるように、奴隸であるとする説に對しては、必ずしも贊成しないのであるが、少くとも、殷王の勢力範圍内の社會全體に、以上のような衆の地位を適用して考えている。しかし我が國における研究では、この衆を一種の集團、殷の社會を構成する族のなかの特定の集團の一つであるという説が有力であるとされることを考えると、張氏のように、社會的に一般化することは危険であると言わざるを得ない―西周金文では個人單位に衆とよばれるものがあるけれども、殷代ではそうは考えられないように思う。まして衆が、戰爭捕虜である羌などによって補充されたと考ええることは無理ではなからうか。また甲骨文にあらわれる「喪衆」という語の喪を *escape* と譯しているが、誤りではないかと思う。 *escape* であるならば、衆自身の意志によつて行われることである筈であるが―もっともそれが絶無であったとは私も考えないが―、甲骨文に見る限りでは、そのように理解することは困難なように思う。

また、手工業なども、族によつて行われるのであるが、安陽地區の薛家莊苗圃北地で發見された鑄銅遺址に地上建築が存在したことから、當時の青銅鍛冶屋、少くともそのなかの高い地位のものは、當時の上層階級としての收入を享受していたと張氏は考える。これは殷或いは周代をも含めて、古代の手工業というものの地位を考え

るのに、重要な指摘であると考えられる。というのは、手工業などの、王或いは政治権力の上で王につながる貴族などに對する隸屬性のみが一般に強調され勝ちであるからである。

V 王位相續制について

張光直氏はかつて「商王廟號新考」という論文において、殷の祖先の廟號にふくまれる十干は、その祖先の生日或いは死日を示すものではなく、十箇の集團の名であるとし、このうち乙（甲を含む）を主とする集團と、丁を主とする集團が有力で、王位はこの二つの集團との間で、伯叔父から甥へと交互に相續されるのが、當時の慣習であったと考える——この際、所謂兄弟相續といわれる同世代間相續は一應はふかれる。この十集團は、當時の支配階級である。子³姓氏族のなかでも最も有力な王族を構成する下位集團であり、王族内の族内婚によって、王位の相續が行われたとするのである。この考えは、本書にも受けつがれ、この相續法を乙—丁システムと呼ぶ。そして乙集團のものが王となったとき、丁集團の長或いは有力者は、首相の地位にあつて、政治に大きな力をもつとともに、王の死後には、自集團から王を出すようにした。そのためには、二集團間の世代交差的な相續制が維持されることが望ましく、これによって、王位を王族内に獨占しておくことも可能であったと考えるのである。

それならば、王族が族内婚を行ったことは何によって考えられるか。それには、先にふれた婦好墓出土の青銅器の銘文が有力な證據とされる。婦好という名は、甲骨文にもよくあらわれ、また婦好以外にも、婦娒と呼ばれるものが多數あらわれ、武丁の妣と考えられ

ている——必ずしもすべての研究者によって認められる説ではないが。しかも婦娒の某はその女性の出身の族を示すものであるが、殷は子姓と言われるので、婦好の好字を構成する要素である子は、當然殷族の出身であることを示すことになる。また婦好墓からは、婦好の銘をもった多數の青銅器とともに、母辛の銘をもった青銅器が五點出土しているが、これは婦好の死後、その祭祀のための青銅器が作られ、それに婦好の廟號として出身の下位集團を示す「辛」が使用されていたと考える。従つて婦好—母辛は子姓氏族のなかの王族中の辛集團出身の女性ということになる。もっとも、武丁にはこの妣辛をもふくめて、妣癸・妣戊の三人の祭祀上の法定配偶者——第二期祖甲や第五期帝乙・帝辛時の五祀に祭祀される先妣のこと——があり、何れも王族内の女性であるから、婦好という名は、一般的には妣癸・妣戊にも適用できたとも張氏は考えている。

しかし、張氏は、王位の相續には、子王の母親の集團の力が重要な働きをしたとも言ひ、またそれ以外に、王となるべきものの徳をもふくめた政治力や政治的追隨者のグループも重要な力であったと言っているから、若し王が、乙—丁集團にかわつて、自己の母親の集團を相續制の中心に置くことを意圖すれば、それは可能であった筈であり、とくに伯叔父から甥へという世代的な交差相續はある點では母系相續とも考えられるのであるから、何故乙—丁システムが可能になったかという説明が今一つ説得力に缺けるように思われる。とくに祭祀においては、女性が從位におかれているからである。

一體、殷の王位相續には、兄弟相續と一般に言われている同世代間の相續も頻繁に行われており、その際には、乙・丁以外のものによって相續されることが多い。張氏はその理由については特にふれ

ないが、一般的には一夫多妻婚であったから、母親の出身が有力な集團であることが重要であったと張氏は考えている。それならば、殷王の祭祀法定配偶者は何によって決定されたのであろうか。とくに殷王の祭祀法定配偶者の數と、その王の子の世代の「兄弟相續」をした王の數とが一致することが多いということは――張氏も言う如く全部が全部一致するわけではないが、母と子王との關係が緊密なものであったことを示している。しかし母の十干と子の十干とは、ごく一部をのぞき一致しないということをどのように説明したらよいのであろうか。祭祀法定配偶者というものが、單に祭祀上の必要からのみ全く人爲的に設定されたとは考えられないように思うのであるが、如何なものであろうか。また乙・丁を名とする妣があらわれないのは、張氏によれば、例えば乙出身の王が丁出身の女姓と結婚することは、有力者同士の結合が強くなるため禁じられていたと説明される。然し大庚・大戊などにもそれが見られないのであるから、果して張氏の言うように考えることが可能であるのか、張氏が自説をより説得的にするためには、これでは不充分のように考えられる。

それは兎も角、張氏はこの乙―丁システムをもととして、この二有力集團が對立していたことは、董作賓氏の言う新派・舊派の祭祀などの慣習上の對立とも相關するものであると考える。例えば舊派である武丁と、舊派に復歸した文武丁とはともに丁集團であり、これに對して新派の祖甲と、新派に復歸した帝乙とはともに乙集團―甲集團は乙と一體化していたと張氏はする―であることになる。従つて丁集團は舊派の慣習をもつ集團であり、乙集團は新派の慣習をもつ集團であることになる。それならば、文武丁の父世代の武乙は

何故に新派ではなかったのか、ということが問題になって来る。とくに陳夢家氏や私は、新派から舊派への復歸は、武乙の父の康丁であると考へており―この場合も舊派への復歸は丁集團であるが―、また董作賓氏が文武丁時代とした甲骨文が實は武丁時代のものであり、武乙時代と文武丁時代を含む第四期卜辭は、ともに舊派の性格をもつていて嚴密には區別できないのが實情であることも併せて考えた上での説明が必要となるであらう。

またこの乙集團―張氏によれば、甲のほかは庚・辛もふくまれる―と丁集團―庚・辛はこれにも含まれる―との對立は、侯家庄西北岡で發掘された大墓の配置とも對應すると張氏は考える。この西北岡の大墓群は、東西二地區に分れるが、西區は七墓あり、これは盤庚・小辛・小乙・祖庚・祖甲・武乙・帝乙の乙集團の王の數と對應し、東區の四墓は武丁・廩辛・康丁・文武丁の丁集團と對應しているとする。しかもこれは、さきの新・舊の分派とも對應することになるのであるが、先にも指摘した如く、武乙が新派に屬する確證はないし、盤庚・小辛・小乙の甲骨文は未發見であるから、このように言うことは危険である。然し、これは一つの考え方としては、興味ある問題であるが、これを擴大して、小屯の基壇群も、東西に對稱的な配置をもち、これは二集團の關係とも對應していたということにまで展開されると、資料的には全く問題にならなくなる。というのは、小屯村北の基壇群は、一番南のしかも最も小規模な丙組に、一部東西對稱の基壇の配置が見られるに過ぎず、他の甲組・乙組の大部分は、このような東西對稱の配置をもっていないからである。さらに張氏は、これを周代の昭穆制とも關聯づけようとする。しかし、周代の昭穆制は、族外婚を基礎とし、血のつながる父子相

續を建前として行われるものであるのに對し、殷の乙—丁システムによる場合は、世代間の關係が、周のような直接血のつながりが無いものであるから、この二つを同一視することは問題であらう。

またこのような乙—丁システムをとる場合、甲骨文にあらわれる大示・小示或いは大宗・小宗をどのように理解するかが當然問題になる。大示とは、一般には王系において父子相續を行った各世代の一人の王の總稱であり、祖甲や帝乙などの時代の所謂新派の祭祀において、配偶者である妣が祭祀される。小示はそれ以外の所謂兄弟相續をし、しかもその配偶者が祭られない王の總稱であるとして一般には考えられている。これに對して、張氏は、乙—丁システムによつて別の解釋をすべきであるという。その解釋は必ずしも明示されていないと私は思われるが、乙と丁とを名にふくむ王—乙には甲・戊を加え、庚・辛は兩者にふくまれると張氏は言う—が、世代的に交互にあらわれること、即ち伯叔父から甥へという相續制によつて考えようとするように見うけられる。しかし、とくに庚・辛の二つを兩者のグループに屬せしめて考えなければならぬということからは、やはり説得力を缺くことになると言わねばならない。

この問題は實は重要な問題であると私も思っている。と言うのは、私自身、例えば武丁と祖甲との關係は、血のつながる父子であったとは考えられないと見るからである。この點は、單に舊派と新派との關係から考えられるばかりではなく、祖甲が、武丁のみに對して特殊な祭祀を二・三年間に集中して行っており、これは擬制的な父子關係をつくり出すためであつたろうと考えられることから、先ず誤りはないと思う。それならば、大示として表現される父子關係とは何であり、また何故こうしたことが必要とせられたか、

私には充分な説明ができないのが實情である。この點で、張氏の言う乙—丁システムは、確かに魅力ある理論であると思うが、如何にしてこの理論を補強するかが今後の課題であらう。それとともに、現状では、この理論を餘りにも擴大し過ぎるように判斷される。なお張氏は、甲骨文にあらわれる大示・小示と大宗・小宗とを同一視しているが、實際の資料について見る限り、大宗・小宗の性格は明らかではなく、とくに大示・小示とは全く別のものであると考えられる。また大宗・小宗は、周代における宗法制の大宗・小宗とも合致しないことを注意しておく。

さて以上、五點について私の評を述べて來たが、この五點は個別の問題ではなく、いずれも相互に關聯するものであることは、理解していただけたと思う。ということは、著者の張光直氏が、殷代社會の多方面の問題を一つの歴史像のなかに統一的に把握しようと努力されていることを示している。現在の研究情況のもとでは、個々の研究者が、自己のテーマの究明を急ぐ餘り、ともすれば時代の全體像を見失ひ勝ちである。そのために、本書はやはり重要な意義をもっていると言わねばならない。一讀をおすすめる。その際卷末に附せられた書目と索引を充分利用されることを願う。特に索引は、本書の理解をよりよくするように作られている。このことは我が國の研究者の不得手な所であり、また一般に等閑視され勝ちな點であるので、自戒の意味をも含めて、特に注意を喚起しておきたい。

Yale University Press,
1980. xvii, 457pp.